

1 阪本四方太

俳句との出会い

《資料1》 年譜 生年から明治27年まで

明治6年(1873) 0歳 鳥取県岩井郡大谷村に生まれる。

明治13年(1880) 7歳 醇風学校入学。

明治19年(1886) 13歳 鳥取県尋常中学校(現・鳥取西高等学校)入学。

明治21年(1888) 15歳 京都の第三高等中学校補充科入学、次いで第三高等中学校大学予科に進級。

明治27年(1894) 21歳 7月、学制改革により第三高等中学校が廃止。仙台の第二高等学校大学予科転校する。高濱虚子、河東碧梧桐の手ほどきで俳句を始め、新聞『日本』の俳句欄に正岡子規の選で俳句が掲載される。このとき、四方太から俳号の命名を頼まれた虚子が、「よもた」を音読して「しほうだ」と名付ける。

《資料2》 虚子の記憶

「私が四方太君を知つたのは仙台であった。京都では時を違へて同じ下宿にみたこともあるし、同じ予科に席を置いてみたのであるが、確か私の方が一級上であつたかどうかで、顔を見合つたことはあつても、それほど頭に残るほどの親しみはなかつた。仙台では一緒の級に居たので顔も毎日のやうに見合つてみた上に、繞石君と二人で、碧梧桐君と一緒にみた私の下宿にやつて来て俳句を教へて呉れと言つた。」(波線——小山)

「四方太君追想」『ホトトギス』大正六年七月

《資料3》 第三高等中学校学校一覧より

明治25年9月 本校予科生徒参百五拾五人内 予科第一級甲組 阪本四方太

予科第一級丙組 高濱清 大谷正信

明治26年 本科一部第一級(文科志望生) 高濱清

本校予科生徒 予科第一級甲組 大谷正信 河東秉五郎

予科第一級乙組 阪本四方太

スクリーン1 「第二高等中学校 学校一覧 明治27年度」一部

《資料4》年譜に追加事項

明治25年(1892) 19歳 9月 第三高等中学校に進級。

明治27年(1894) 21歳 「第二学年」(に転校する。)を追加。

明治29年(1896) 23歳 7月 第二高等中学校卒業 を追加。

《資料5》四方太の心に響いた虚子・碧梧桐の句 『尚志会雑誌』第7号

芭蕉が杖つけそめしむかしゆかしく来てみれば

栗の飯かしく姉なく妹なし 虚子

皆やせてむつの人見ゆ秋の風 碧梧桐

先代の帝都に名刹古閣のありぬながめせし身は

陸奥のあき風われもやせたりな 全

三百里秋かぜふかぬ里もなし 虚子

風流の田植歌のこらずとも人なさけ深く屋上石の磊々たるを見る

朝寒の白粥うすくあたゝかし
たゞさびし石おく家の秋の暮

虚 碧

(以下17句・前書き略)

《資料6》子規選初めて『日本』に掲載

はらはらと散るや墓場の古柳

四方太

新聞『日本』明治27・10・30

スクリーン2 現存する旧制高等中学校(第五高等中学校)熊本市内

子規と四方太

スクリーン3 子規の実際の風貌 明治32年12月24日 子規庵蕪村忌集合写真

四方太の俳句

スクリーン4 四方太短冊 月の江に舟して郎と帰るかな (『春夏秋冬』所収句)

《資料7》四方太の俳句 『春夏秋冬』より

竹に打ち葉蘭にはぢく霰かな

畑打の語りあふなり国境

○ 風の尾の泥にすれ行く町の中

売家や芽を吹く柳涸るゝ井戸

○ 古畳つめたき秋の昼寝かな

○ 梁上の君子の尻や明易き

○ 短夜や蚤の落ちゆく部屋の隅

○ 蟹つぶやき鮓憤る沙干かな

○ 夏羽織懐にして戻りけり

鹿笛の近づきやがて遠ざかる

稲掛に蝨飛びつく草の風

茶を売つて世を渡りけり衣更

大門を押されて入る桜かな

○ 家を埋めて菜の花午なり人の声

○ 冴ゆる夜の星落る処千鳥なるべし

(参考文献)

「第十六 阪本四方太」 中村楽天 『明治の俳風』 明治40・9

「坂本四方太」 萩原蘿月 『俳句研究』 昭和14年5月号

「坂本四方太」 伊澤元美 『俳句講座8 現代作家論』 明治書院 昭和33年12月

「坂本四方太のこと」 高田一大 『日本海新聞』 44・11・27

『近代文学注釈大系 近代俳句』 神田秀夫・楠本憲吉 有精堂 昭和44年6月

『現代俳句大辞典』 明治書院 昭和55年9月 石田勝彦・『現代俳句辞典』 富士見書房 昭和63年1月 村山古郷・『現代俳句大事典』 三省堂 2008年9月 柴田奈美

晩年の四方太

スクリーン5 萩原蘿月 昭和18年

□ 卯の花会の人々

卯の花会の誕生

スクリーン6 「樗谿小集」明治32年9月 表紙
スクリーン7 「樗谿小集」一部 巴水（後、坡酔）選一部

《資料8》 卯の花会の人々

寒樓 田中国三郎。明治十年、現在の八頭郡河原町に生まれる。「卯の花会」の中心的存在。小学校の代用教員、訓導兼校長を経て、各地を転々とする。古希記念句集『しも』、一言集『天人帖』、歌集『弓張岳』、『歌集・寒樓』等作品を遺す。昭和四十年五月没、九十三歳。

桂堂 久保田熊蔵。慶応二年現鳥取市に生まれた。東京高等商業学校卒。後司法官になる。明治二十五年俳句を作らんと志し、松山在職中日本派の三余会を興して活躍。丸亀に在職してから讃岐俳壇の創始者となる。その後、鳥取地方裁判所の判事として帰鳥。明治三十四年二月五日没。三十六歳。

笹舟 佐々木惣一。明治十一年現鳥取市に生まれ、鳥取中学、第四高等学校、京都帝国大学法科卒。同大学の教授となる。憲法の権威。昭和四十年没。八十七歳。

紫溟郎 紫溟とも。太中梅三。明治十六年現鳥取市に藤次郎の次男として生まれ、一高に入ったが病氣中退。後京都帝国大学専科教員養成所英語専攻を出て今治、松山等三校で教鞭を取る。鳥取中学の校長代理もした。英語の天才で大正十二年四月退職して三省堂に入り、大阪支店長次いで本社常務取締役として活躍。昭和三十年没。七十三歳。

二桐 桂雨とも。山本寛之輔。鳥取市茶町太中家の縁故者。太中家の援助で中学を卒業。放哉より一級上。

坡酔 初め巴水と号す。尾崎脩三。尾崎時雨の弟。(目参照)

素水 素琴・翠明とも。吉村欣二。明治十六年現鳥取市生まれ。中学卒業後醤油醸造の家業を継ぐ。大正鳥取銀行の創立、経営に参画。昭和二年から十年まで鳥取市の収入役。碧梧桐来鳥に際し大いに歓待した。昭和四十三年没。八十五歳。放哉より一級上。

天抄 閑雲軒、如々とも。岩田勝市。明治十七年現鳥取市立川町の生まれ。早大を中退して帰郷。鳥取高等女学校教諭、鳥取新報記者、東伯郡社団法人奨恵社主事、鳥取仏教教育青年会会長を歴任。短歌も作り、方言研究、童話研究科家。昭和三十年没。七十一歳。放哉より一級上。

春光 春水とも。入澤武治。明治十六年日野郡日南町矢戸に生まれる。(目参照)

萩水 黄葉村とも。山崎甚八。明治十七年現鳥取市立川町に生まれる。神戸に転住し、昭和三十三年没。七十五歳。放哉より一級下。

時雨 篤次郎。坡酔の次兄。坡酔と共に「卯の花会」を支えた。魚町の質商尾崎又次郎の次男で明治三十八年独立して金物商を経営。家を句会に提供していた。鳥取市議会副議長の経歴がある。

目 「卯の花会」の三人の俳人達

尾崎坡酔

卯の花会と坡酔

スクリーン8 中学時代の尾崎坡酔

スクリーン9 (右) から素琴(素水)・坡酔・二桐

スクリーン10 坡酔中学時代の「卯の花会」写真

スクリーン11 「卯の花会」樗谿神社の外門の前

新傾向俳句へ

スクリーン 12 碧梧桐と鳥取の俳人達

その後の坡酔

《資料9》坡酔の句

中学時代 吹き出で、砂鉄流るゝ清水哉

明治33年9月 「鳥城」第二号

胸病んで身にしむ春の寒さ哉

明治34年7月 「鳥城」第四号

新傾向時代 瀧の神蹴落す水や山桜

明治42年 『日本俳句鈔 第一集』

轡祝ひに招かれぬ炭の値の立ちて

大正2年 『日本俳句鈔第二集』

晩年 糸瓜忌や碌々として我ありぬ

昭和12年 「一家言」

尾崎放哉

放哉と「卯の花会」

上京後の「卯の花会」との関り

スクリーン 13 一高時代の放哉

スクリーン 14 暮るゝ日や落葉の上に塔の影 放哉 明治40年12月19日『国民新聞』

《資料10》『因伯時報』に載った放哉の新傾向的俳句

梅に牛繋ぎし事も立志伝 放哉 明治44年2月27日『因伯時報』

梅香酒氣に遠かる頃を月逸す 同 同

スクリーン 15 東洋生命株式会社時代の放哉

無一物時代

《資料11》放哉晩年の句

須磨寺時代 雨の日は御灯ともし一人居る

大正13年8月号『層雲』

小浜・常高寺時代 海がまつ青な昼の床屋にはいる

大正14年9月号『層雲』

小豆島・南郷庵時代 咳をしても一人

大正15年2月号『層雲』

同 墓のうらに廻る

大正15年4月号『層雲』

入澤春光

鳥取中学時代

スクリーン 16 中学時代の入澤春光

卒業後

スクリーン 17 春光の書齋 「突兀楼」(碧梧桐命名)

没後

スクリーン 18 日野の広尾に建つ春光の頌徳碑

《資料12》 入澤春光の俳句

中学時代 未枯れて寂しうなりぬ麓町

明治33年12月 『鳥城』第三号

新傾向時代 暑中閑居紙魚は冷たきものに見ゆ

明治43年7月24日 『因伯時報』・『日本俳句鈔第二集』

自由律時代 降つて晴れた朝で起きる

大正15年11月 『層雲』